

| | |
|---------------|---|
| <p>事案名</p> | <p>美幌町の事案（北海道1 - 2）</p> |
| <p>分類</p> | <p>生産・保有 廃棄・遺棄</p> |
| <p>資料</p> | <ul style="list-style-type: none"> ・ Intelligence Report on Japanese Chemical Warfare Volume [1] ・ 「各航空廠引渡目録」 2 / 2 [2] ・ 『朝日新聞』 平成 8 年 1 0 月 1 9 日 [3] ・ 証言 [4] ・ 『美幌新聞』 平成 8 年 1 0 月 2 8 日 [5] ・ 『読売新聞』 平成 8 年 1 0 月 2 6 日 [6] ・ 証言 [7] |
| <p>資料内容概要</p> | <p>終戦時に、第 4 1 海軍航空廠美幌分廠には、イペリット爆弾と通常弾の総計で 1, 0 6 0 発が保有されていた。終戦後、各航空廠にあったイペリット爆弾は米軍の監督指揮により海上投棄されたといわれているが、同分廠にて保有していたイペリット爆弾と通常弾は、旧軍によって、網走沖及び屈斜路湖に遺棄されたとの証言がある。</p> <p>生産・保有情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 資料によれば、終戦時に第 4 1 海軍航空廠（千歳・美幌）にはマスタード 6 0 Kg 爆弾 2 1 7 発が存在していたと記載されている [1]。 ・ 資料によれば、終戦後の段階で、第 4 1 海軍航空廠美幌には、6 0 Kg 通常爆弾・ 6 0 Kg 陸用爆弾・ 6 0 Kg 1 号爆弾・ 6 0 Kg 2 号爆弾が総計 1, 0 6 0 発存在していたと記載されている [2]。 ・ 元海軍美幌航空隊航空廠関係者の証言として、「終戦時に同廠には、同廠の西側に掘った数本の隧道に一つずつ木箱に入れて保管しており、1 0 0 発前後あったという（この毒ガス弾は後に網走港沖に投棄したと同僚から聞いたとのこと）。投棄された毒ガス弾は皮膚がただれるようなものと聞いているが、木箱に入っていたので、形は分からない」と記載されている [3]。 <p>廃棄・遺棄情報</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 元第 4 1 海軍航空廠美幌分工場補給課の軍属の証言として、毒ガス弾は昭和 1 9 年に 1 0 0 発程度運ばれてきた記憶がある。上司が毒ガス弾だと教えてくれた。終戦直前に出張があり、「8 月 2 2 日に美幌に戻ってきたときにはすでに普通弾も毒ガス弾も処分されなくなっていた。当時作業に携わっていた部下の話では、爆弾は全部網走の海に捨てたと言っていたのを聞いているので多分ガス弾も混じっていたものと自分 |

| | |
|--|--|
| | <p>なりに判断した」としているが〔４〕、同証言者は、新聞記事によれば、第４１海軍航空廠美幌分工場長から、保管していた爆弾の一部を米軍引き渡す分として残し、大半は網走港沖に捨てたことを聞いた」と記載されている〔５〕。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・元美幌警防団副部長の証言として、「美幌警察署長の命令で、美幌航空隊の地下トンネルに保管していた爆弾類や小銃類の処理班に組み込まれ、弾薬類などの運搬と海中投棄の作業にあたった。網走港から漁船で、「二つ岩」を左にした状態で、約３０～４０分出た辺りに捨てた。証言者は同様の作業にあたった同僚から、その後、「自分は屈斜路湖に捨てに行った」との話を聞いているが、捨てた爆弾類のなかに毒ガス弾があったかどうかは確認していない」と記載されている〔６〕。 ・元第４１海軍航空廠警防班の軍属の証言として、「昭和１８年から２０年までの間、ガス弾は一度に１００発ずつ３回列車で輸送されてきた覚えがある。敷地内には地下壕が多数あり、ガス弾専用の地下壕に入れてあった。終戦時に、上司から、通常弾は網走沖に投棄し、『ガス弾は屈斜路湖へ輸送し湖に投棄すること』との指示を受け、２日間にわたり、一日約３０発計６０発を屈斜路湖に投棄させたが、証言者自身はトラックに積み込む作業を行っただけで廃棄場所へは行っていない。『ガス弾についてはすべて屈斜路湖に投棄しており、網走には投棄していない。投棄場所は、湖にある半島付近に多く投棄したと聞いている』と記載されている〔７〕。 |
|--|--|